

野  
村  
館  
跡  
  
—塩尻市広丘駅東第二土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 野 村 館 跡

塩尻市広丘駅東第二土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

長  
野  
県  
塩  
尻  
市  
教  
育  
委  
員  
会

2001  
長野県塩尻市教育委員会

## 例 言

1. 本書は塩尻市広丘駅東第二区画整備事業に伴う野村館跡（長野県塩尻市大字広丘野村）の発掘調査報告書である。
2. 現場での発掘調査は、平成11年8月3日から平成11年8月31日まで実施した。また、遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、平成12年5月から平成13年3月まで行った。
3. 本書の作成にあたり、作業の分担は次のとおりである。  
遺物洗浄：大和 廣  
遺物註記：市川きぬえ、野村悦子  
遺構整理：小松 学、 塩原真樹、一ノ瀬 文  
トレース：小松 学、 塩原真樹  
写 真：小松 学（遺構）、塩原真樹（遺物）  
編 集：塩原真樹
4. 本書の執筆はⅢ-3を野村一寿、Ⅳを岩垂俊雄が、それ以外を塩原がおこなった。
5. 本調査ならびに報告書執筆にあたり、塩尻シルバー人材センター、岩垂俊雄氏、野村一寿氏からの御支援、御指導を得た。銘記して感謝申し上げたい。
6. 本調査の出土品は、諸記録は平出博物館に保管してある。なお、今回の調査の出土品に註記した遺跡番号は「88」である。

# 目 次

例 言

凡 例

<b>I 調査状況</b> .....	<b>3</b>
1. 発掘調査にいたる経過	
記 録	
発掘調査実施計画書	
2. 調査体制	
3. 調査の経過	
4. 遺跡の状況と面積	
<b>II 遺跡の立地と歴史的環境</b> .....	<b>5</b>
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
<b>III 調査の結果</b> .....	<b>7</b>
1. 調査の概要	
2. 遺 構	
3. 遺 物	
<b>IV 野村館跡の歴史的考察</b> .....	<b>11</b>
<b>V ま と め</b> .....	<b>16</b>

# Ⅰ 調査状況

## 1. 発掘調査に至る経過

### 記 録

- 平成11年 7月 9日 塩尻市広丘駅東第二土地区画整理事業用地内の埋蔵文化財発掘調査について、塩尻市と委託契約を締結
- 12月21日 埋蔵文化財発掘調査の報告について
- 2月29日 塩尻市広丘駅東第二土地区画整理事業用地内の埋蔵文化財発掘調査について、塩尻市と委託変更契約を締結
- 平成12年 3月31日 「野村館跡発掘調査終了について（通知）」を長野県教育委員会に提出  
「野村館跡埋蔵文化財発見届・保管証（届）」

### 発掘調査実施計画書（一部のみ掲載）

1. 発掘調査地：塩尻市大字広丘野村
2. 遺 跡 名：野村館跡
3. 遺跡の現況：地目（原野）
4. 発掘調査の目的及び概要：開発事業「塩尻市広丘駅東第二土地区画整理事業」に先立ち、1,000㎡以上を発掘調査して記録保存をはかる。
5. 調査の作業日数：発掘作業20日・整理作業16日・合計36日  
○平成11年度 発掘作業20日・整理作業0日・合計20日  
○平成12年度 発掘作業0日・整理作業16日・合計16日
6. 調査に関する費用：2,278,000円  
平成11年度：1,778,000円  
平成12年度： 500,000円
7. 調査報告書作成部数：300部
8. 発掘調査の主体者及び委託先：塩尻市教育委員会

## 2. 調査体制

- |       |      |                      |
|-------|------|----------------------|
| 調査団長  | 平出友伯 | (塩尻市教育長)             |
| 調査担当者 | 小松 学 | (日本考古学協会員・塩尻市教育委員会)  |
| 調 査 員 | 小林康男 | (日本考古学協会員・塩尻市教育委員会)  |
|       | 塩原真樹 | (長野県考古学協会員・塩尻市教育委員会) |

発掘・整理参加者 市川きぬえ、一ノ瀬 文、宇賀田まさ子、内川初雄、大和 廣、  
小沢甲子朗、小泉忠行、小島武子、小松千元、小松幸美、進藤真一郎  
高井いえ子、高木 保、高橋阿や子、高橋鳥億、竹下栄次、野村悦子、  
野村一寿、原口慶市、藤掛寿子、藤森昭治、降旗 勝、古畑 伝、  
矢ヶ崎さえ子、由上はるみ、水口尚子、

事務局 塩尻市教育委員会・生涯学習部長 飯田正弘  
塩尻市教育委員会・社会教育課長 濱 良光  
塩尻市教育委員会・平出博物館長 小林康男  
塩尻市教育委員会・平出博物館学芸員 小松 学  
塩尻市教育委員会・平出博物館学芸員 塩原真樹

### 3. 調査の経過

平成11年8月3日 作業員による遺構検出作業を開始する。  
平成11年8月20日 現場での調査が一応終了。器材等撤収。  
平成11年8月31日 遺構平面図、遺構写真撮影等現場における作業を終了する。

整理作業及び発掘調査報告書の作成は、平成12年5月から平成13年3月まで平出博物館において実施された。

### 4. 遺跡の状況と面積

第1表 発掘調査の状況と面積

遺跡名	場 所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	調査面積	調査経費
野村館跡	塩尻市 広丘野村	原野	居館址	3,500㎡	1,500㎡	1,000㎡	2,278,000円

第2表 発掘調査経過一覧表

遺跡名	平成11年度									平成12年度									
	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
野村館跡	発 掘									遺物整理・図画作成・原稿執筆									

## II 遺跡の立地と歴史的環境

### 1. 地理的環境

野村館跡は、塩尻市北部の広丘野村地籍に所在している。西側に1 kmほど行けば、国道19号線、JR広丘駅などがあり、人の往来の激しい場所である。東側に目を向けると、田川と長野自動車道が寄り添うように南北に伸び、さらにその奥には高ボッチ山、鉢伏山といった筑摩山地のなだらかな山稜が控えている。この付近の地質は田川によって搬入された砂礫層からなる沖積層を基盤としている。

本遺跡は田川に面する底平地に立地しており、海拔は660m前後である。現在は原野・畑地・宅地等になっている。

### 2. 歴史的環境

野村館跡が所在する広丘野村地区は、遺跡の分布が非常に少ない地域である。本遺跡及び周辺の詳細な歴史的環境は後章にゆずることとし、ここでは本遺跡周辺に所在する主要な遺跡を時代ごとに取り上げて概観してみたい。(第1図)

#### 〈旧石器時代〉

この時代の遺跡は松本平では非常に少ない。塩尻市内では田川流域を中心とした地域に集中する。丘中学校遺跡からはナイフ形石器、槍先形尖頭器、神子柴型尖頭器など数十点出土している。このほか黒崖遺跡、北ノ原遺跡などからも槍先形尖頭器などが見つかっている。

#### 〈縄文時代〉

縄文遺跡の密集地帯である東山山麓部に比べると、平野部である本遺跡周辺では縄文時代の遺跡は極めて少ない。黒崖遺跡で早期押型文土器、一夜窪遺跡で早期から中期の土器が僅かに見つかっているにすぎない。

#### 〈弥生時代〉

弥生時代に入ると、遺跡の分布も東山山麓部から田川流域に集中するようになる。丘中学校遺跡からは鉄釧と110点ものガラス玉が副葬されていた方形周溝墓が検出されている。ほかにも北ノ原遺跡から4軒の住居址と土器、石鎌、石包丁、磨製石斧が、黒崖、一夜窪遺跡などから土器や石器が見つかっている。

#### 〈古墳・奈良時代〉

この時代の遺跡は塩尻市全体をみても少ない。本遺跡周辺では該期の遺跡は現在のところ見つかっていないが、宗賀地区の平出遺跡ではまとまった遺溝が検出されている。このほか広丘高出地区の和手遺跡で28軒、田川を挟んだその対岸に所在する中挾遺跡で7軒の住居址が発見されている。また、東山山麓の菖蒲沢窯跡から、瓦塔や鳥形硯が見つかっていることも注目される。

〈平安時代〉

田川流域において最も隆盛を極める時期である。丘中学校遺跡では36軒の住居址が見つかったほか、吉田川西で 271軒、吉田向井で 94軒というように大規模な集落の存在が目立つ。このことから当時の生活の中心地がこの地域にあったことは疑いようがない。



1. 野村館跡 2. 吉田川西 3. 吉田向井 4. 花見  
5. 野村 6. 丘中学校 7. 高田

第1図 野村館跡周辺遺跡分布図 (S=1:20,000)

# Ⅲ 調査の結果

## 1. 調査の概要

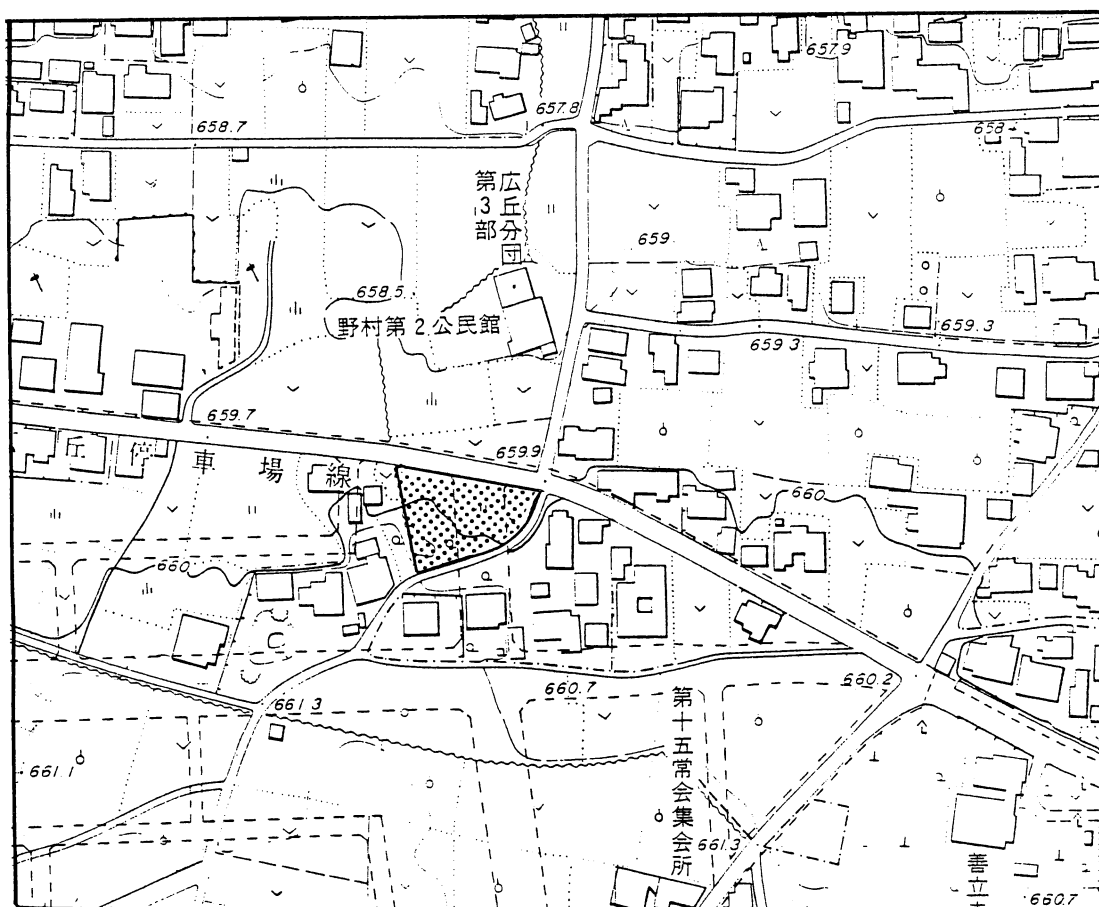
塩尻市広丘野村地区に所在する野村館跡は、塩尻市北部の田川底平地と呼ばれる地形に立地している。(第2図)

この場所に居館跡があったらしいということは以前から知られていたが、居館が建てられた時期、住んでいた人物、建物の構造等、その詳細については分からないことが多い。館跡は現在、道路・田畑・宅地等になっていて、堀の遺構が残っている程度である。

今回の発掘調査は、広丘駅東第二土地区画整理事業に先立って行われ、調査面積は1,000㎡におよんだ。その結果、堀や主郭部と思われる遺構、中世の青磁碗片や近世の陶磁器片などの遺物を検出することができた。しかし、掘立柱建物址や土坑、土塁といった遺構は検出することができなかった。

なお、調査の方法に関しては、表土の除去から遺構の検出・掘り下げ全てを手作業で行った。

(第3図)



第2図 野村館跡調査地区図 (S=1:2,500)





第3図 野村館跡遺構全体図 (S=1:400)

## 2. 遺 構

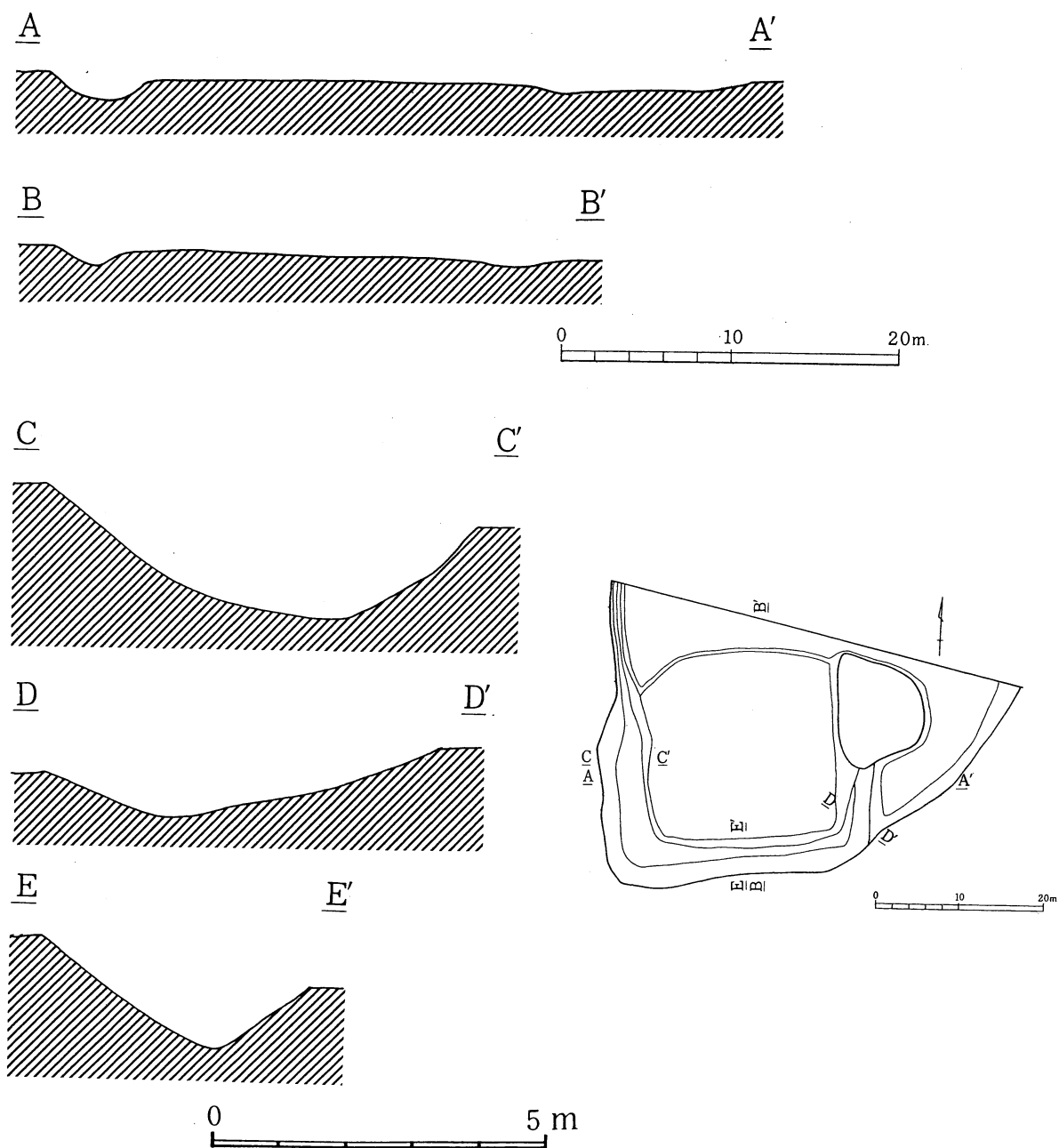
### 〈主郭部〉

礫が多いうえ、木の根がしっかり這っていたため、検出が困難で十分に遺構を明らかにできたとはいえないが、堀に囲まれた部分を主郭部と推定した。大きさは東西、南北ともに約20mを測る。主郭内部に土坑や堀立柱建物址などは検出できなかった。(第4図)

### 〈堀〉

調査以前から堀の遺構は良好に残されていたが、幅と深さの詳細な記録を取るため、さらなる検出作業を行った。堀の南西部は湧水による水溜りがあったためこれを除去し、検出を行った。その結果、主郭部を取り囲むように南・西側で堀を検出することができたが、東側の一部が攪乱されていたため検出することができなかったほか、北側も調査区外にあるためか検出できなかった。

幅は南側4.5m、東側5.2mを測る。西側の堀は最大幅6.5mで、北行するに従って狭くなり、用水路と重なる。主郭部からの深さはそれぞれ南側70~90cm、東側55~60cm、西側75~180cmで南西部に行くほど深くなっている。堀の底の幅は全体的に1m前後だが、南西部は広い所で3.5mを測る。壁の立ち上がりは比較的なだらかで、その角度は10°~35°である。(第4図)

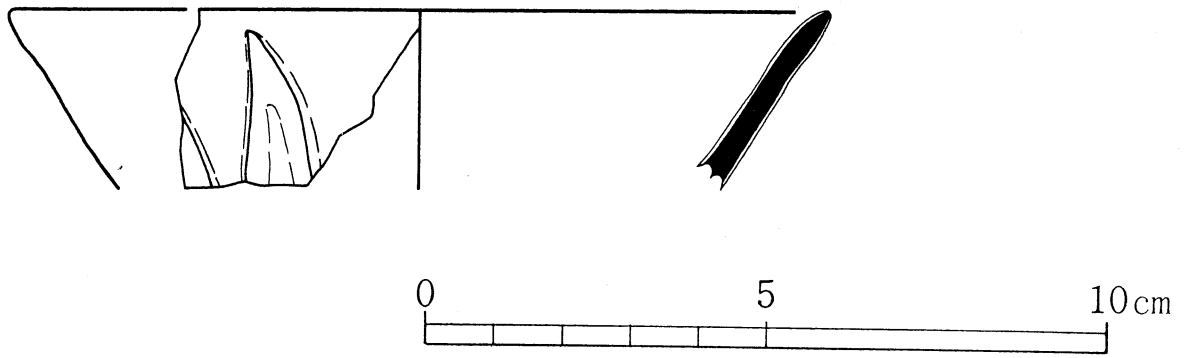


第4図 野村館跡遺構および掘断面図

### 3. 遺物

遺物は全て主郭部からの出土で、中世の青磁碗が2点、近世の陶磁器は21点出土している。そのうち図示できたのは青磁碗1点のみで、細目の鎬蓮弁文が施されている。13世紀から14世紀にかけての時期である。(第5図)

近世の陶磁器としては、19世紀後半から20世紀にかけてのもので、総じて新しい。陶器は鉄釉の製品が多いが、小破片で器種はよく分からない。その中で洗馬焼かと思われる甕が出土している。(写真図版参照)



第5図 野村館跡出土遺物

## IV 野村館跡と周辺の歴史的考察

岩 垂 俊 雄

### 1 古代 一奈良・平安時代一

塩尻市広丘野村の地は古代の良田郷に属し、北に良田郷の中心地と目される塩尻市吉田地区が展開している。

良田郷は、古代信濃国筑摩郡6郷、<sup>よしだ</sup>良田・<sup>そが</sup>崇賀・<sup>からいぬ</sup>辛犬・<sup>にしごり</sup>錦服・<sup>やまむべ</sup>山家・大井（「倭名類聚鈔」）のうち田川水系に関わり開発された地域で、田川の上・中流域にあっている。

田川は上流で四沢川、矢沢川、権現沢等の小河川を合わせて北上し、その間に、鉢伏山系から流れ下る片丘地区の小河川や、塩沢川、牛伏川など右岸からの水流を合わせ、下流で松本市中心部を流れる女鳥羽川合して、奈良井川に合流する比較的小規模な流域であり、開発も容易であったようである。筑摩郡に国府が移転したといわれる8世紀末の延暦8(789)年には、渡来人系の後部牛養・宗守豊人等が<sup>たがみのみやつこみほ</sup>田河造の姓を賜っているのは、畿内からこの地域に移住し開発に尽くした功績に報いるための賜姓であったものであろう。良田郷の東に隣接する山家郷には埴原牧（信濃16御牧のうち）があって、信濃の牧を統べる牧監が御牧経営に当たり貢馬育成に努めていた。

この良田郷地域を古代交通の面から見ると、令制東山道（「延喜式」）は美濃国から信濃国神坂峠を越え、伊那郡・筑摩郡・小県郡・佐久郡を經由して碓氷峠から上野国に入る。その間、信濃国には15駅があり、天竜川右岸地域を北上してきた東山道は深沢駅から善知鳥峠を越えて覚志駅に至り、刈谷原峠を越えて錦織駅に出て、麻績郷を經由して越の国に至る支道を分岐し、本道は保福寺峠を越えて小県の浦野駅に向かっていと推定されている。

一方、木曾谷筋の<sup>きそじ</sup>吉蘇路は『続日本紀』和銅2(713)年条に、「美濃・信濃二国の境、径道<sup>けんあい</sup>険隘にして往還<sup>かんなん</sup>艱難なり。よって、吉蘇路を通ず」とあり、この開道工事を指揮監督した美濃国司笠麻呂は褒賞に預かっている。この頃の両国の境は県坂（鳥居峠）の峯であったという。

このようにして筑摩郡南部の良田郷と西に隣接する崇賀郷は古代の都に通ずる幹線道路の通過地域となっていて、交通の要地であった。善知鳥峠を越えた東山道がどこを通過したのか、覚志駅の所在はどこなのかについては諸説あるが、弱点もあって定説化していないが、いずれにしても良田郷の地域内を經由していたとする点では共通している。

延暦13(794)年、都が平安京に移ると、ほぼ同じ頃、信濃国府が小県郡から筑摩郡に移されたといわれるが、その所在については女鳥羽川が南下する部分の東側にあたる地域、松本市惣社、同横田が推定されているが確定するまでには至っていない。

平安時代の良田郷地域は田川端・中挾・五日市場・丘中学校・君石・吉田川西・吉田向井等遺跡の発掘調査から開発が進んだ様子が窺われる。

吉田川西遺跡は中央道長野線工事に伴って県埋蔵文化財センターが昭和59・60年度に60×300㎡にわたって田川西岸の遺跡の北半分を発掘調査したものである。遺構は8世紀から12世紀にまでの竪穴住居址266軒・堀立柱建物址8棟・溝9条・墓壇2基であった（「塩尻市誌Ⅱ」）。

出土品の中でも特に墓壇の副葬品の緑釉陶器7点（国重要文化財指定）、灰釉陶器、土師器、黒漆椀、乾漆の箱に入った八稜鏡などの逸品は、地域文化の繁栄と有力者の存在を裏付けるものであり

殷富の輩の台頭も考えられそうである。また、吉田長者屋敷の長谷寺跡とつたえられる場所の整地の際に発見された護摩炉は、その変遷を知るうえで高い資料的価値を有するものであるという。国衙在庁官人の有力者との関係も推察できるのではなかろうか。

## 2 中 世 — 鎌倉・室町時代 —

源平合戦で平家が壇ノ浦で滅びた翌年の文治2(1186)年、後白河法皇は源頼朝に対して、下総・信濃・越後の3ヵ国の年貢未納荘園の目録を発して催促するように要求した。

信濃国の分として荘園・郷61ヵ所、牧28ヵ所が記載されている。これによると、「倭名類聚鈔」の良田郷は消滅していて、吉田・野村周辺地域では、八条院(鳥羽上皇の娘)領の白河郷、小俣郷、熊井郷、捧中村荘、捧北条荘。連華王院(後白河法皇御願寺)領の洗馬牧。殼倉院領(左馬寮牧)の岡屋、平(立カ)野、小野、南内、北内の牧等が上げられている。これは京都の荘園領主に年貢を滞納している荘園であって、荘園領主の支配力が貫徹しない状態になっていたことを示しているが、年貢を納入した荘郷名については分からないので、吉田・野村周辺地域にどのような荘郷が存在していたのか明らかにできない。吉田については、約100年後の弘安3(1286)年、備中国川上郡穴山郷に地頭職を与えられていた筑摩郡赤木郷の赤木氏が「吉田郷の田4段」と「小池郷の在家2字」の所領をいとこ同士で争い、鎌倉幕府に訴え和解した下知状により、赤木氏の勢力圏内であったことがわかる。

鎌倉幕府の滅亡により室町時代が始まったが、中先代の乱、護良親王・新田義貞と足利尊氏の権力争い、室町幕府の成立、南北朝分立、尊氏・直義兄弟の争いなど中央政局が混沌とする中で信濃も大きく揺れ動いた。

正平10・観応4(1355)年、宗良親王・諏訪直頼・仁科氏等と守護小笠原長基の軍が桔梗ヶ原で戦った。親王は南朝の勢力挽回のため、伊那大河原に入って反幕府反小笠原勢力を糾合して武蔵・越後など各地に転戦したが、桔梗ヶ原合戦に敗れて南朝の勢力は著しく弱体化した。(「園太暦」)この戦いによって、京都の朝廷で行われる駒牽きに信濃の貢馬が予定通り到着せず、式日が延期されたという。その後も、小笠原氏と諏訪氏の反目は続き、塩尻金屋(井)の合戦(1365年)、熊井原の合戦(1387年)などが繰り返された。このような状況の中で小笠原氏は府中南部の防衛線の強化を計ったようである。

野村の名前は長享2(1488)年の諏訪社下社「春秋之宮造宮之次第」に初出する。

この記録は、この年は酉年で古例の宮造りと立て御柱の年に当たるので、信濃国各郡の郷を指定して造宮役銭を割当てたものである。これによると、下社秋宮の若宮造宮役割当て24郷の内、「塩尻西条、同所下方、塩尻金井」(旧塩尻地区)、「熊井北・南、中交(挾)」(片丘地区)、「平井豆、床尾」(宗賀地区)、「堅石、野村、吉田」(広丘地区)11ヵ村に割当てがあった。また春宮御柱1本役が「蘆田、古祖父、岩垂」(洗馬地区)に割当てられている。この年は、塩尻市内の村々に割当てが集中したようである。

## 3 戦国時代

諏訪を平定した武田信玄は天文13(1544)年10月から、翌14年6月にかけて伊那北部に侵攻した。13年には、辰野に入って箕輪の福与城の前進基地荒神山の藤沢頼親を攻めたが、藤沢頼継の援軍

に阻まれて、甲府へ引き上げた。

14年4月、信玄は甲府を発って杖突峠に陣取り高遠の藤沢頼継を攻める構えを見せたので、頼継は城を捨てて逃亡した。引き続き箕輪に進撃した信玄は福与城の藤沢頼親を攻撃した。頼親の妻の兄である小笠原長時も頼親支援に出陣して龍ヶ崎城に入り支援したので、攻防は長引いたが6月1日落城、頼親は弟を人質に差し出して降伏し、11日に城は焼き払われた。伊那北部を平定した信玄は余勢を駆って長時の根拠地筑摩郡府中に兵を進めた。

信玄の幕僚駒井高白齋の記録『高白齋記』には次のように記されている。

「6月13日、朝8時頃箕輪を御立ちにになり、塩尻に御陣所を設けた。高白(齋)陣所で鶉を捕らえたのを(信玄に)進上した。

14日、林近所迄放火する、桔梗ヶ原に御陣所を移す。熊野井の城が自落した。夜12時過ぎ出発して小笠原の館に放火し、15日桔梗ヶ原で勝鬨を上げた。16日に陣払いをして、17日甲府に帰った」。伊那の藤沢氏を下し、次の長時との戦いに備えての前哨戦が始まったのであるが、ウズラを賞味したり、陣所を移動して勝鬨を上げて帰還するなどの記述には、武田軍の余裕さえ感じられる。天文17(1548)年正月、信玄は上田盆地に進出して坂木城の村上義清と上田原で激戦を展開した、村上軍は良く戦い、武田方は板垣信方ら有力武将が次々に戦死し、信玄も手傷を負うという惨敗であった。この村上義清軍の勝利に鼓舞された信濃武士の意気はおおいに上がり、『高白齋記』は「小笠原長時、村上義清等ト共ニ、諏訪郡下宮ヲ侵ス、尋デ、マタ侵ス」とあり、1回目の4月には村上、小笠原、仁科道外、藤沢頼親等が下諏訪まで押し出して放火した。2回目は6月に小笠原長時が兵を出し下宮付近まで攻め込んだが、手強い反撃に多くの損害を受け長時も負傷して引き下がった。

7月10日に諏訪の西方衆が反旗を翻したので、信玄が甲府から出陣した、西方衆に呼応して、長時も兵を率いて出馬した。信玄は19日朝6時頃塩尻峠にたてこもっていた「小笠原長時責め破り数多く討ち捕られ候」(『高白齋記』)と塩尻峠・勝弦峠一带の郡境の戦いで勝利を収めた。

小笠原方は武田方へ寝返る者が出るなどして、5000余人の内1000人余が討ち取られるという惨敗であった。この結果は、信濃の歴史の大きな転換点となった。

信玄は早くも10月には村井の城の普請に掛り府中平定の拠点を確認し、小笠原長時の根拠林に大きな圧力を加えた。天文18(1549)年、信玄は佐久、上伊那方面で反武田の動きに対しての戦いに力を殺がれていたが、19年には小笠原長時攻撃を再開した。

#### 4 野村館跡と名和無理之助

信玄が天文17年10月に早くも村井の城の普請に取り掛かったのは、村井から東北方向7kmに近接する根拠地・林城館に拠る長時の動きを封じるとともに、占領した筑摩郡南部の小笠原直轄地を確認して、降伏した西山方面の三村氏、西牧氏等と長時包囲網を形成することを目指したものであろう。奈良井川の東に位置する村井小屋の城は単独では平地のはだか城であり、周囲に支えの城がなければ守り難いので、周辺の赤木山城、小池砦、吉田長者屋敷、野村館、内田横山・真田等の城砦を取り立てて防備堅めの工事を平行して進め、片丘・塩尻の熊井、西条その他の諸城も手直して、甲府・諏訪との連絡路を確認したものであろう。

天文19 (1550) 年、伊那・佐久を制圧した信玄は、7月10日、村井の城に入った。15日、手始めにイヌイノ城 (所在不明) を夕方までに攻め落として勝鬨を上げ、村井の城に引き上げた。これに怖じ氣ついたので、小笠原方の本拠地防衛線を形成していた林大城・深志・岡田・桐原・山家の5城の兵は、戦わずして深夜に逃げ去り、浅間・島立の城は降参して、小笠原方は総崩れになってしまった。こうして府中は戦らしい戦も無く信玄に占領されてしまった。19日に深志城の歟立式をして、23日から総普請に取り掛かった。21年6月には熊井の城の歟立てが行われた。

このように、深志・村井・熊井の城の防備を固めたのは、安曇・飛騨・川中島進出の根拠地としての府中の戦略的位置を高く評価しての措置であるとともに、信濃平定の強い意志を信濃内外に誇示したものと見えるだろう。天文21 (1552) 年8月小岩嶽城を攻略して、信玄は安曇・筑摩両郡を制圧し、その支配は天正10 (1582) 年3月、武田氏滅亡までのほぼ30年間つづいたのである。

今回発掘された野村館については、享保9 (1724) 年松本藩主水野忠恒が家臣の鈴木重武・三井弘篤に命じて編集させた『信府統記』第18松本領古城記に、次の記録がある。

- 一 小屋村屋敷構：小屋村ノ内ナリ、地内東西二十九間 (52m) 南北四十五間 (80m)、  
古木曾義仲ノ臣手塚太郎光盛居住ノヨシ云ヒツタヘタリ、今八田畑トナル
- 一 野村屋敷跡：武田ノ小臣名和無理之助領地ニテ、住セリト云フ
- 一 吉田村屋敷跡：武田ノ小臣城伊菴領地ニテ、住セリト云フ

享保期の塩尻組の小屋村 (松本市吉川)、吉田村 (塩尻市吉田)、野村 (塩尻市野村) に城館跡があったことを伝えている。野村屋敷跡は、武田の家臣名和無理之助の支配という伝承があるといわれている。実在を疑われるような名前であるが、織田信長の家臣太田牛一が書いた『信長公記』巻八に関連記事が見られる。天正3 (1575) 年5月、信長・徳川家康連合軍が武田勝頼に大勝利を得た長篠合戦の場面である。

「5月21日、寅卯の方へ向かって未刻迄入替々々相戦ひ、諸卒をうたせ、次第々々に無人になって、何れも武田四郎旗元へ馳集まり、叶難く存候歟、鳳来寺さしてどっと廢軍致す。其時前後の勢衆をみだし追はせられ、

討捕る頸見知分

山県三郎兵衛、西上野小幡、横山備中、川窪備後、真田源太左衛門、土屋宗蔵、甘利藤蔵、杉原日向、名和無理助、仁科、高坂又八郎、奥津十郎、岡部、竹雲、恵光寺、根津甚平、土屋備前守、和氣善兵衛、馬場美濃守

中にも馬場美濃守手前の働き比類なし。此の外宗徒の侍、雑兵一万ばかり討死候。」

また、『信長公記』を敷衍して元和年間に書かれた小瀬甫庵の『信長記』には、上記の戦死者を宗徒の侍と侍大将に分け、名和無理助・馬場美濃守・横田備中・杉原日向守・奥津十郎・岡部次郎左衛門・土屋備前守・和氣善兵衛等を侍大将としている。此の合戦のとき、馬場美濃守は武田軍団の五番手の大将として織田・徳川連合軍に最後の突撃を敢行した剛の者であり、名和無理助も劣らぬ剛勇の侍であったようである。5番手の馬場美濃守の攻撃隊は「敵強くとも一足も引き退かず一時に勝負を決せんと思ひ入りたる形勢」で徳川軍に向かって来たので、家康の侍大将石川伯耆守、本山平八等が鉄砲で5,600騎を打ち倒した。しかし馬場隊は退かないので、ついに槍による白兵戦になった。「ここに、渡辺忠右衛門尉、小栗又一郎は、名和無理助と渡し合わせて撞き合ひけるが、鎧をばからりと捨て、打ち物に成って火出づる程切り合ひけれども、二人一人なれば、遂に無理は討たれにけり」これが馬場隊の崩れる切っ掛けとなり、大将馬場美濃守も戦死

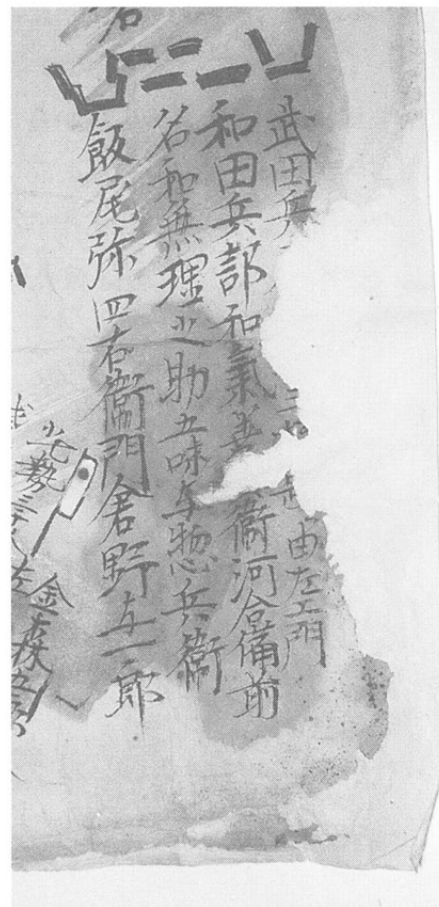
するという戦局に武田軍が総崩れになり、退却することになったという。

このように名和氏は実在の人物で、無理之助は重行又は宗安といひ武田氏に仕えたが、本貫地は明らかでなく、中世上野国那波郡（現伊勢崎市）那波荘出自の武士で、祖父の代に甲斐に移住したのではないかともいうが、詳細は明らかにし得ない。

名和無理助が『信府統記』のように野村を支配していたとして、どのような経営が成されたのであろうか。

『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌・別篇地名』で野村の地名を検索してみると、屋敷、中屋敷、外屋敷、城下、楯下、下町、さかひ、市道、中道、前田、庄内、観音堂、蓮台などの小地名が出てくる。城館に関わるような地名（城下、楯下、下町）、屋敷地名（屋敷、中屋敷、外屋敷）、信仰地名（観音堂、蓮台）、道路地名（市道、中道）は出てきているが、吉田に比べて、用水堰、水田の関わる地名が少なく、武田支配期に開発が進められたようには見えず、その後の急速な開発で現在の集落の姿が出来上がったものではなかろうか。

このように見てくると、「野村屋敷跡」は、信玄が府中攻略の前進基地として急遽構築し、小笠原長時を筑摩・安曇両郡から放逐するまでの間暫く利用した拠点ということになるのではなかろうか。



長篠合戦陣取り図（塩尻市所蔵）

（江戸時代作成。○の部分拡大したのが写真左。）



## V ま と め

野村館跡は、『信府統記』に記述があるように、武田家の家臣名和無理之助の屋敷と伝えられている居館跡である。しかし、名和無理之助本人や、無理之助と周辺地域との関わり等については判らないことが多く、今回の発掘調査で、その点について考古学的な側面から少しでも明らかにできればよいと考えていたが、調査地の状態があまりにも不良であったために遺構・遺物の検出が少なく、以前から残っていた堀の部分を検出するにとどまった。さらに、堀内部の主郭部と思われる場所についても、居館に住んでいた人物の身分・権力・時代等の条件の違いにより一概には言えないが、他市町村で調査された居館跡の主郭と比べてあまりにも小さいなど、多少疑問も残る結果となった。遺物についても、名和無理之助が存在していたとされる16世紀前後のものは発見できなかった。

残念ながら今回の調査から言えることは、堀の部分がはっきりと残り、遺物も出土したことから考えて、何らかの建造物があったことだけである。今後は北側未調査部分の調査や文献からの更なる考察によって本遺跡の性格が明らかになることが期待される。

最後になりましたが、多くの皆様から貴重な御教示をいただきながら、担当者の力量不足でそれらを十分生かせなかったことを深くお詫び申し上げ、また、調査に御理解と御協力をいただいた地元関係者、関係諸機関ならびに発掘作業参加者の皆様、そして本報告書の執筆に御協力いただいた岩垂俊雄氏、野村一寿氏に心より感謝申し上げます、結語といたします。

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	のむらやかたあと							
書名	野村館跡							
副書名	塩尻市広丘駅東第二土地区画整理事業地内の埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	塩原真樹 野村一寿 岩垂俊雄							
編集機関	塩尻市教育委員会							
所在地	〒399 - 6461 長野県塩尻市大門七番町3番3号/Tel 0263-52-1022							
発行年月日	2001年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のむらやかたあと 野村館跡	ながのけんしおじりし 長野県塩尻市 おおあざひろおかのむら 大字広丘野村	20215	262	36° 8' 15"	137° 57' 34"	1999 8.1~ 1999 8.31	1,000m <sup>2</sup>	塩尻市広丘 駅東第二土 地区画整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
野村館跡	居館跡	中世	主郭部 堀	青磁			堀の検出、遺物の出土により、中世居館跡が存在していた可能性が強くなった。	
		近世		陶磁器				

# 写 真 图 版



野村館跡全景（西から）



野村館跡全景（東から）



堀（西側）



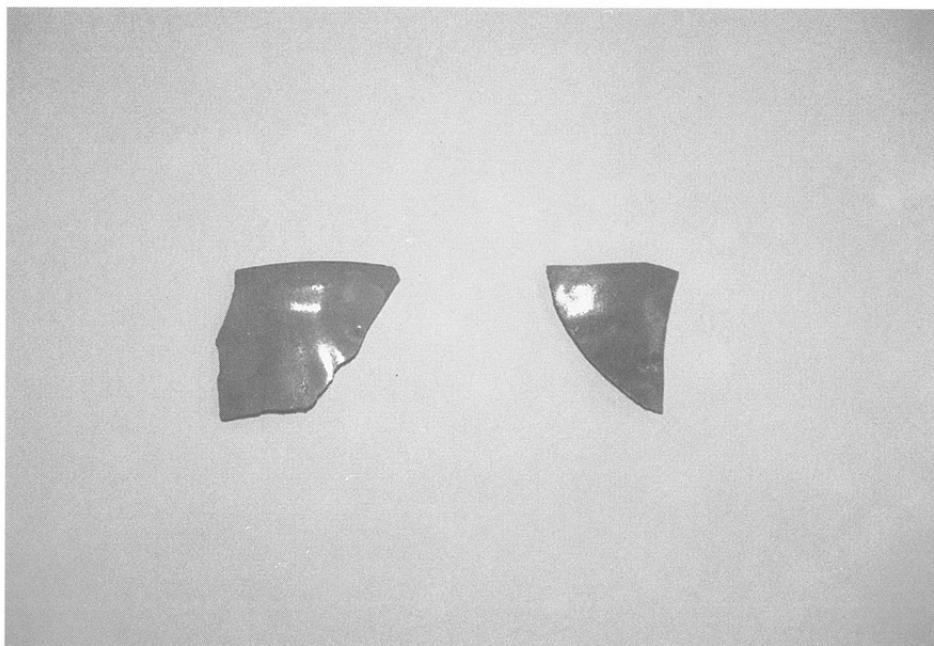
堀（南側）



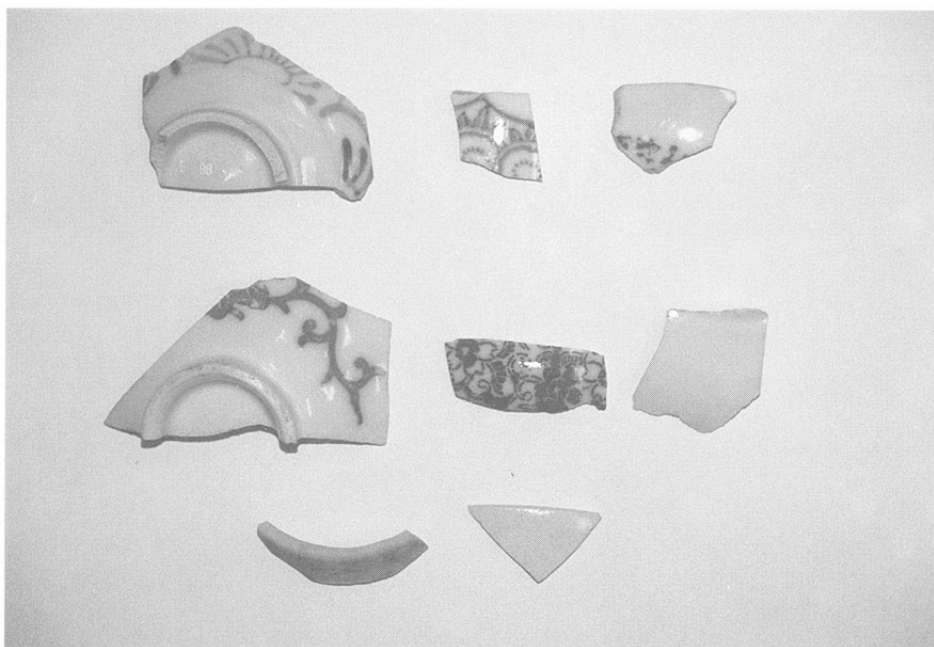
主郭部作業状況



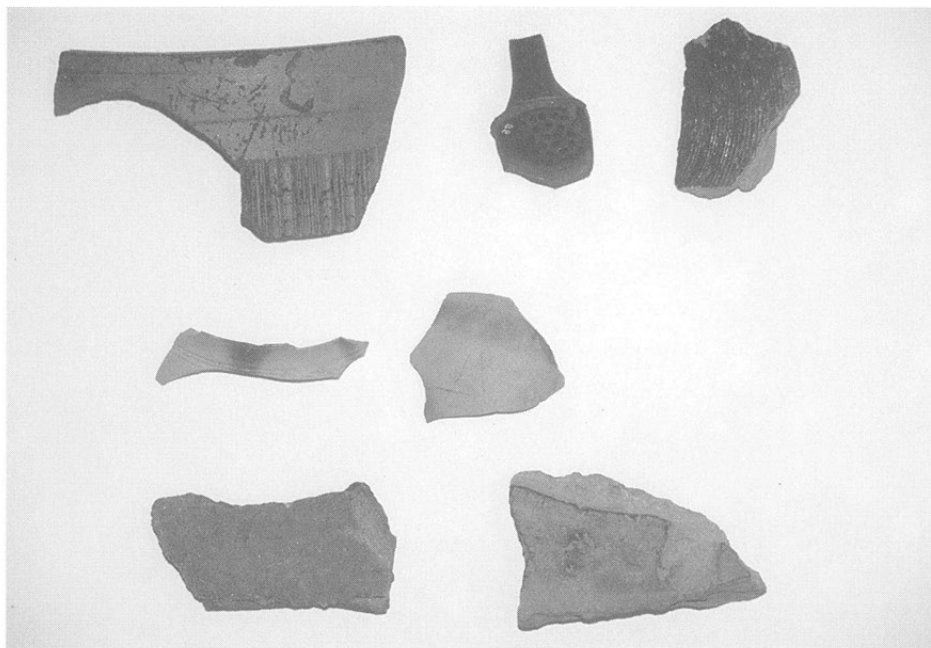
堀作業状況



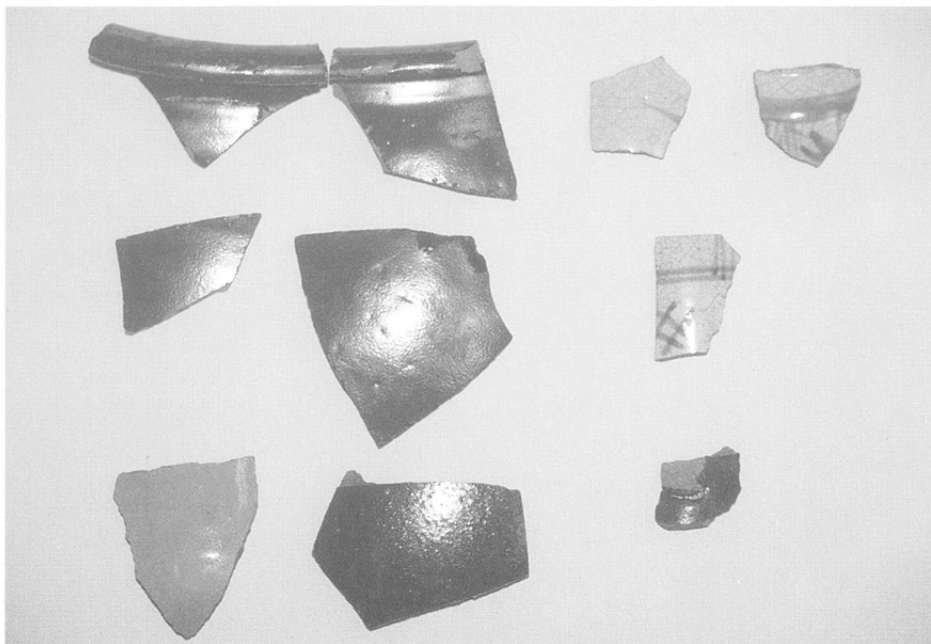
出土遺物（青磁）



出土遺物（磁器）



出土遺物（陶器）



出土遺物（陶器）





出土遺物（洗馬焼）

---

---

## 『野村館跡』

塩尻市広丘駅東第二土地区画整理事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年3月20日 印刷

平成13年3月25日 発行

発行者 塩尻市教育委員会

印刷者 クマガイ印刷所

---

---

